

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

「水沢にもあったナルミマイクロフォトメーター」

天文学の進歩に大きく貢献した事象が幾つかある。その大きな一つは望遠鏡の出現であり、また写真技術の出現である。計算機の出現も大きなことであった。更なる進歩は天文観測から完全に写真を駆逐してしまった CCD の出現である。分光器で写真乾板を用いて天体のスペクトルを撮影し、その解析に使われたものにマイクロフォトメーターという器械がある。中桐が天文学を始めた頃、まさしくこのマイクロフォトメーターを使って恒星大気吸収線などのスペクトル線を解析した。スペクトル線の座標を読み取る器械がコンパレーターであり、吸収線などスペクトル線を描くのがマイクロフォトメーターでいわば走査式写真濃度測定器であった。ところが天体の直接画像、スペクトルが CCD で観測されるようになると、その画像のピクセルごとに番地がついているので、計算機さえあれば、昔のコンパレーターで座標を読む必要も、マイクロフォトメーターでスペクトル線を描く必要もなくなってしまった。そこで国立天文台にあったそれらの器械の大半は破棄されてしまい、僅かに三鷹には天体捜索部にあったマンの座標測定器が旧図書館の片隅に残っているくらいになり、プリンクコンパレーターは歴史館に展示され惨めな姿を晒している。我々が愛用したナルミのマイクロフォトメーターは総て廃棄されており、基線尺倉庫に中桐が持ち込んだリーズのマイクロフォトメーターが残るのみである。運よく4月26日、水沢でナルミのマイクロフォトメーター(写真1)がよい保存状態で現存するのを見つけた。



写真 1

ところが水沢の本館の耐震構造補強工事のため、整理が進んでおり、このマイクロフォトメーターには「廃棄」の札が貼られていた。

これは、天体物理をやった者の「つわものの夢のあと」だ。捨てられてたまるものか、とりあえず、ご案内をいただいた亀谷さんに廃棄するなら、三鷹のアーカイブ室の中桐がもらい受ける、決して捨てることのないようにと、唾をつけた。

その他にも、私には懐かしい、いくつもある「島津のコンパレーター」にも「廃棄」の札が貼ってある。このまま水沢で整理が進めば、貴重な財産・遺産が消えてしまう。さっそく、センター長にお願いした、「水沢で廃棄物品のリストが出来たときには、そのリストを入手していただきたい、その中で保存、展示を考えるべきものはアーカイブ室に譲っていただこうではありませんか」と。下の写真はほんの一例であるが、



写真 2 写真濃度測定器



写真 3 分光光度計



写真 4 柱時計



写真 5 島津のコンパレーター

上の写真のように、「えっ！、これ捨てるの！、もったいない」というものがゴロゴロしているのである。さあ、やることは山ほどあるぞ！